

どこの国にも酒を止められないアルコール中毒患者はいるものだ。中でもロシア人の酒好きは度を超えている。この国では、ワインやビールは酒の内に入らない。すべてウォッカが基準である。ウォッカのアルコール度数は40度前後が一般的であるが、中にはポーランド産のスピリタスという96度の、とても直に口には入れられない途方もなく強いウォッカもある。

夏は夜になると首都モスクワの街のあちこちにウォッカに酔いつぶれた男どもが、無防備のまま屋根の軒下で眠りこけている姿をしばしば目にする。シベリア地方の冬は極寒の寒さであるが、それでも人家も見られない雪の中を千鳥足で歩いている男を見かける。酒なしにはいられないロシア人は、体質的にアルコール人間なのである。「シベリアでは400kmは距離ではない。マイナス40度は寒さではない。ウォッカ4本は酒ではない」という強いウォッカをアピールするジョークまである。

労働者や街に溢れた失業者ばかりではなく、政治家やインテリ層の間でもウォッカは広く愛飲されている。ほとんどのロシア人がウォッカに酔いしれ、過度の飲酒により家庭生活は崩壊し、国民の健康が損なわれ、労働規律が乱れるマイナス面が度々

摘されてきた。結果的に旧ソ連時代末期は経済危機に陥った。そこで政権の座に就いたロシア人にしては珍しく酒嫌いのゴルバチョフ書記長は、病院や婦人団体から飲酒の害悪の訴えを受け、直ちに節酒令を発した。禁酒令を出しては、ロシア人を狂乱に陥らせると考え、それは避けたのである。だが、これによって多くのロシア人の離婚件数が増加したというオチまでついた。「ウン十年ぶりにシラフで女房の顔を見てショックを受けたロシア人が多かった」からとの小喃まで流行したほどである。そうかと思うと一部のウォッカ好きのロシア人は、こんな節酒令程度ではへこたれなかった。こっそり密造ウォッカの製造を各地で始めた。しかし、節酒令により酒を飲む機会が減って労働者がやる気を失くし、経済活動が停滞した。旧ソ連崩壊とともに酒嫌いのゴルバチョフ政権も運命を共にしたとの皮肉まで言われた。その座を受け継いだのが、ウォッカ大好き人間として知られたエルツィンである。泥酔して橋から川へ落ちたエピソードまである酒好きのエルツィンは、新生ロシア連邦初代大統領に就任して、早速節酒令を廃止した。酒好きでなければ、大統領には適さないというロシアのお国柄は、多くの酔っ払いによって支えられている。酔っ払い天国は、国の歴史もふらついてはいまいか。ウクライナ侵攻もウォッカのせいだろうか。エッセイスト 近藤 節夫